

偶然の家族

落合恵子

中央公論社

偶然の家族

一九九〇年三月一五日 初版印刷

一九九〇年三月二五日 初版発行

著 者 落合 恵子

発行者 嶋 中 鵬 二

印刷所 三 晃 印刷

製本所 小 泉 製 本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替 東京二―三四

© 1990 CHUKORON-SHA, INC.
Printed in Japan

ISBN4-12-001905-5

偶然の家族

その古びたアパートは、早稲田通りから少し入ったところにある二階建ての洋館である。

敷地の三分の二は、よく手入れがされた庭になっている。

アパートの持ち主の城田夏彦（しろたなつひこ）が園芸の趣味を持っているおかげで、住宅の密集地にありながら、洋館の住人たちは贅沢を味わうことができるのだった。

もっとも夏彦の恋人の山下平祐（やましたへいすけ）によれば、

「誰も草花のことなんか、わかっちゃいないんだから」と、いうことになる。

夏彦は五十八歳。平祐は六十六歳である。

もともとの洋館は、夏彦の両親のものだった。

フランスまで絵の勉強に行ったことのある父親が、夢破れて日本に帰ってきたときに建てたもので、そう思っただけで、一階にはアトリエの痕跡がある。そこはいま、夏彦と平祐の居間になっていて、時にはアパートの住人が集まる場所ともなる。

夏彦は母ゆずりの園芸が趣味となっていた。といっても、ことさら高い花を植えるというのではなく、雑草に近いものから立木まで、あらゆる植物を育てている。

夏彦に言わせれば「大らかな植物園」だし、平祐に言わせれば「大ざっぱな畑」ということになる。

東京の中野区にあるので、年中、不動産屋がマンションにしないかと誘いをかけてくる。地上げ屋まがいの男たちが押しかけてきたこともあるし、知らぬ間に売りに出されて大騒ぎとなったこともあった。

JR中野駅から歩いて十五分という距離だから、不動産的価値は夏彦にも十分に想像がつく。三百坪をわずかに越える敷地は、周囲の密集ぶりに比べると、異様な感じを持つほど放りだされた趣をただよわせている。

しかし夏彦は、自分が可愛がる草花のために、頑として売却に耳を貸さない。

それどころか、敷地をコンクリートの塀で囲んでしまっている。それは、「草花のためには、やるべきことではなかった」と夏彦も認めているが、喧騒を避けるために、あえて選んだ方法だ

った。

コンクリートの塀には、トタンに白塗りして「この土地は絶対に売りません 所有者」という看板をかけている。デザイン的には「なんと無様だろう」と平祐が言った通りだが、夏彦にしてみれば「窮余の一策」にすぎない。

門扉がこわれて門柱だけになった入り口から、日本風でも西洋風でもない夏彦風の庭を小径で左右に割った突き当たりが、洋館だった。

門柱の左の柱には、陶器で墨入れた城田夏彦の表札が埋め込んであり、右の柱には「榎^か櫃^{りん}庄^{さう}」と木の札がかかっている。

洋館の一階は、夏彦と平祐で使っているが、浴室だけは、二階の住人も含めて共同使用になっている。

二階には四つの部屋があつて、三室は同じ大きさ、奥の一室だけが一・五倍ほど大きくなっている。それぞれの部屋のドア脇にも木の表札が、「胡桃^{くるみ}」「楓^{かえで}」「木槿^{むくげ}」「桐^{きり}」と墨書きされてかかっている。

「安手の旅館だって、こんな名前つけないわよ」

かつて平祐がそう言つて夏彦をからかったが、命名は夏彦の母親だった。

片端から、庭にあつた木の名をつけていったという雑な命名であつたようだ。俳句をやる住人

が、「秋の季語ばかりだ」と言ったこともある。

「落葉の木ばかりだから、この榎櫃荘に住んでいたら、一生浮かばれない」

そう言っただけで追い出された俳人のことは、伝説になっていた。

しかしいま、胡桃の木は庭にはない。蟻にたかられたのか枯れて、もうずっと前に伐り倒されていた。

榎櫃荘は、南東に向いて建つ木造の洋館だが、門から見て二階の左から、「胡桃」「楓」「木槿」「桐」の部屋が並んでいる。

胡桃の部屋をのぞくと、それぞれの部屋の前に部屋の由来の木が植えられていて、フランス窓を開けると、その木が目の前に見えるのである。

楓の部屋には五十歳のグラフィックデザイナー、肥満の鵜沢哲郎が、木槿には書店に勤める三十一歳の高山恵理子が暮らし、胡桃の部屋には、朝永宗太という、法学部に通う大学生が起居している。

いちばん右側の桐の部屋だけが、ほかのところより大きく、小児科医院の事務をしている三八歳の志賀恭子が、六歳の滋とふたりで、離婚後の生活をしている。この部屋だけが大きいのは、かつては夏彦の姉、多香子の部屋としていたせいである。

住人たちはそれぞれに、城田夏彦、ただしくは城田の家と繋がりをもっていて、不動産屋を通

して入居してきたものはいない。

朝永宗太は、父親が夏彦と同窓だった。

宗太の父親宗之は、学生時代から城田の家に住み込んで大学に通っていたほど仲がよく、フランス文学の翻訳の勉強に渡仏するまで、榎植荘の胡桃の部屋に起居していた。

もっとも、夏彦たちの学生時代にはまだアパートではなく、したがって胡桃の部屋などという命名はされていなかった。

夏彦の父親、城田忠長はすでに亡かったが、母親の月子がまだ健在だった頃である。

どの部屋にもフランス風の装飾がなされて、ゆったりと暮らしていた時代だった。

月子は忠長がフランスから帰国してすぐに結婚したのだが、そのとき月子は三十五歳、忠長は五十五歳だった。

月子は、多香子と夏彦に、忠長の話をよくしたが、結婚当時の話はなぜかしたがらなかった。親戚とのつきあいがほとんどないことと関連があるらしいのだが、姉弟とも、月子が話さないことを無理に訊きだそうとはしなかった。したがって、母の月子のいないいま、その理由は闇の向こうに消えてしまっている。

鵜沢哲郎は、忠長の親友の息子だという。

フランスから戻った忠長は、絵筆を握ることからいっさい離れてしまった。時折り、女子大学

へフランス語の講師として出かけていくくらいで、ほとんどを家の書斎で過ごす生活だった。そこへ訪ねてきた唯一の友人が鵜沢哲郎の父親、厚太郎こうたろうだったようだ。

ふたりはいつもフランス語で会話をし、フランス語を解さない月子は、鵜沢厚太郎が訪ねてくると不快だった、と夏彦に話したことがある。

しかしこの話も、夏彦の姉の多香子に言わせると別のことになる。

「鵜沢のおじさまが訪ねてくる目的は、おとうさんではなく、月子さんにあったのよ。おじさまは決して奥さんを連れてこなかったし、第一、わたしは月子さんとおじさまがキスしていたのを見たもの」

多香子が六歳のときだったという。夏彦が四歳のときになる。

「おとうさんは六十を越えて、臥ふせることが多かったわ。病気のせいで、いつもベッドのうえで癪癪かしゃくを起こしていた。ある日は、月子さんとおじさまのことに気づいての癪癪かしゃくだったかもしれない。……あの日、お見舞いに来たおじさまを、月子さんが送りこいたの。わたしに、おとうさまを見ていてねって言って。すぐに戻ると言ったのに、とても長く感じた。そのとき、おとうさんが激しい咳をしはじめたの。わたしが怖くなるくらいに激しい咳だったわ。ついに我慢しきれなくなって、月子さん呼びに駆けだしたら、玄関を出たところで、おじさまが月子さんを抱いていたの。わたしは、声もだせずに見ていたわ。……女の子って、六歳にしてもう、そういうこ

とを知っているのよ。声をだしてはいけないって。やがて、月子さんがおじさまの腕のなかで、わたしに気がついたわ。……キスを続けながら、目だけはわたしを見ていたの」

夏彦は、多香子からこの話を何度も聞いている。暗記しているように、少しも違わない話をする多香子だった。

鵜沢厚太郎は、月子と十歳しか違わなかった。夫と二十歳も離れていたので、月子が厚太郎を好きになるのは自然なことのように、夏彦には思える。

「おしゃれな月子さんが、あのずんぐりとしたおじさまを、どうして好きになったのかしら」

多香子はしかしそう言った。楓の部屋の鵜沢哲郎は、父親の厚太郎に、いやになるほど似ているとも言う。

木槿の部屋の高山恵理子は、多香子がいま一緒に暮らしている男の姪である。

学生時代にバスケットをしていたというだけあって、榎檀荘では、いちばん背が高く、百七八センチもある。

「こんなに天井の高いところを探すのは、ほとんど不可能ね」

恵理子が多香子について榎檀荘を訪ねて以来、部屋があくのを待っていて入居したのだった。

桐の部屋の志賀恭子は、忠長と月子が死を迎えた病院の院長の孫娘だった。

何不自由なく暮らした娘の時代、やがて栃木県の旧家の大病院に嫁いだものの、どうしてもそ

の家に馴染めずに、三歳の滋を抱えて実家に戻った恭子だった。

しかし戻ってみると、恭子の実家は、すでに昔の実家ではなくなっていた。一族が病院の経営を巡っていがみ合う様相となっていたのである。

居続けられないこともなかったが、恭子は実家をでて職を求めた。そうして小児科医院、といつてもひとりで行っている町医者のところ、に事務員として働きにでた。

はじめての仕事だったが、保険の点数を計算したり、受付をしたりといった生活のほう、はるかに気が休まった。気がかりは、三歳の滋だった。保育園に預けることはできても、ひとりしかない事務員では送迎もままならないことがある。

そんな悩みを持っていたときに、恭子は夏彦に出会った。

恭子の勤める小児科医院が榎檀荘の近くということもあったが、偶然の出会いだった。夏彦と恭子とは、月子の入院中にお互いよく見知った顔になっていた。

それは、月子が病んでいながら、院長宅の夕食を食べにいくという勝手をしていたせいだった。病院長というのが、フランス時代の忠長をよく知っていたのと、奔放な月子を気に入っていたからだった。

「特別食を食べに行つてますよ」

病室を見舞うとたいいベッドは空で、夏彦は看護婦や付き添い婦にそう教えられたものであ

る。夏彦は院長宅に母の月子を見舞い、当時、大学生だった恭子とよく顔を合わせていた。

そんな背景があつて、滋を連れした恭子が榎檀荘に移ってきた。多香子が五歳年下の元倉稔と^{もとくらみのる}住むようになって、すぐのことである。

志賀恭子にとって、榎檀荘は別天地のように快適だった。母子の侘しいふたり住まいから、子ども時代の大家族に戻つたような解放感があつた。大家族でありながら血の繋がりもなく、銘々が勝手に暮らしている、といったところも良かった。

滋の保育園の迎えの心配も解消された。夏彦や平祐、それに住人たちの誰かがやってくれたし、恭子が帰ってくるまで誰かが遊んでくれたからだった。

こんな具合にとにかく、いまの榎檀荘の住人は誰もが、城田家となんらかの關係を持って入居している。この何らかの知り合いに限るといふ不文律は、月子が生きていたときにはじまつたことなのかもしれない。夏彦も多香子も知らなかったが、結婚によって断たれた姻戚關係を修復する気持ちには、おそらく月子にはなかったのだろう。かわりに、月子は無意識のうちに血縁のない“家族づくり”をはじめたのかもしれない。

城田の洋館を突然に改造してアパートにしたのは、月子が六十歳のとき、夏彦が大学を中退した年だった。

その頃、夏彦は詩を書く一方で、父親の影が何らかの形で照射したのか、フランス語に夢中になっていた時期でもあった。

大学は五年目に入っていた。というより、ほとんど大学には行かないで、詩を作る仲間たちと詩談義に明け暮れる日々だった。

ある明け方酔って帰ってくると、家の前に止まったトラックからおびただしい木材がおろされるところだった。その日が改造の初日だった。

「月子さんは、夏彦に生活力がないと悲観してアパートをはじめたのよ」

姉の多香子は、ずっと後年になってそう言ったが、ともかく、夏彦も多香子も、改造工事のことは何も知らされていなかった。

「夏彦さんは、月子さんのお気に入り。わたしは月子さんの嫌われ者」

常々、多香子はそう言って、拗ねるといふより夏彦をからかった。

姉がそう言うのも無理もない、と夏彦は思った。

工事が終わってみると、夏彦は階下で母親と暮らし、多香子は改造した二階の一室を使う算段になっていた。しかも多香子は、家賃を払わされたのである。

「月子さんと鵜沢のおじさまのキスを、わたしが見てしまったからよ」

多香子は、六歳のときの事件にすべての原因があると半ば冗談、半ば真顔で諦めて、榎檀荘の

住人となった。

「人の恋路を邪魔するやつは、馬に蹴られて死んじまえ」

母の月子は酔うと、かならずそう歌った。案外に多香子の言うことは真実なのかもしれないと夏彦は思うことがある。

「あのキス以来、鶯沢のおじさまは、うちに来なくなったのよ。わたしは、ひそかにそのことを喜んでいただけ」

多香子はそう告白した。

父の忠長を、母月子よりも愛した。多香子はそれも告白している。

「あの頃から、うちにはお金がなくなったのよ、きつと。何らかの形で収入が必要になったんだと思う。働きはじめたわたしから、もっとも合法的にお金のとれる方法でもあったし」

多香子の性格も不思議だった、と夏彦は思う。

そのころには珍しくファッションモデルの仕事についていた。ちょっとしたサラリーマンの倍は稼いでいたからでもあろう。多香子は素直に月子の計画に従った。

「嫉妬かもしれないな。母と娘って、そういうところがあるのよ。月子さんの時代、女は特に窮屈だったから。わたしが、恋していたことも、月子さんにはおもしろくなかったのかも。……同居していれば、いやでもわたしの外泊やデートがわかってしまう。そのことがいやで、遠ざけた

のかもしれない」

これは、月子の通夜の晩に、多香子が夏彦に語ったことである。

2

「何をしてるんだい？」

朝永宗太は、桐の木の下で遊んでいる滋に声をかけた。

はっとしたように滋が顔をあげる。その顔が真っ青だった。

「どうした」

滋が指差したさきで、蜂が尺取虫しゃくとりむしを運んでいる。

「気味が悪いんだろう」

宗太は、子どもの小さな人差し指の可愛さのほうに気になったが、からかうように言った。

「ぼくが、あんなふうにしちゃったの」

滋は小さな声で言った。

「あんなふうになって？」

よく聞いてみると、こういうことだった。